

春の叙勲に本学から6氏

北海道大学が、知財功労賞 経済産業大臣表彰を受賞

北海道大学 純米吟醸「北の閃き（きたのひらめき）」の販売を開始





新入留学生オリエンテーションを開催



技術連携統括本部主催  
第2回ITeCHシンポジウムを開催

## 全学ニュース

- 1 春の叙勲に本学から6氏
- 9 令和8年度4月採用北海道大学次世代AI博士人材フェロ  
シップ 採用者ガイダンスを開催
- 10 新入留学生オリエンテーションを開催
- 11 海外ラーニング・サテライト事業合同説明会を初開催
- 12 北海道ガス株式会社 × 北海道大学「海外ラーニング・  
サテライト事業海外研修プログラム」報告会を開催
- 13 北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）
- 16 技術連携統括本部主催第2回ITeCHシンポジウムを開催
- 17 産学・地域協働推進機構、台湾・国立陽明交通大学と  
MOUを締結 ―アントレプレナーシップ教育とスタート  
アップ推進の国際連携へ―
- 18 北海道大学が「知財功労賞 経済産業大臣表彰」を受賞
- 19 北海道大学 純米吟醸「北の閃き（きたのひらめき）」  
の販売を開始
- 20 きたキッチンで「北海道大学フェア」を開催
- 21 帯広を舞台とした企業の課題解決型ワークショップ  
「私がつくるまちの未来 Obihiro Next」を開催
- 22 「NINEJP Cross-Border Session～未来を切り拓く、  
アグリバイオの挑戦～」を開催
- 23 アントレプレナーシップ教育プログラム成果報告会  
「Hokkaido Innovation Hunter」を開催
- 24 研究シーズの事業化支援プログラム「北海道BRAVE2025」  
成果報告会を開催
- 25 北海道大学Climate Action Planを策定
- 26 インターンシップ&就職活動スタートアップガイダンス  
を開催～令和8年度キャリアデザインセンター就職ガイ  
ダンスがスタート～
- 27 インターンシップ&就職活動スタートアップガイダンス  
を函館キャンパスにて開催

## 部局ニュース

- 28 「春の園遊会」に長谷山美紀教授が出席
- 29 国際広報メディア・観光学院が台湾にて留学生向け説明  
会を実施
- 30 脳科学研究教育センター脳科学専攻の開講式を挙行
- 31 附属図書館北図書館2階アクティブラーニングフロアが  
「Suzuyo Mirai Square」に名称変更―鈴与株式会社と  
ネーミングライツ契約を締結―

## 研修

- 32 令和8年度北海道地区国立大学法人等初任・新任職員研修

## 人事 33

- 33 新任教授紹介

## 訃報

- 34 教授 澤村 正也 氏



北海道大学 純米吟醸  
「北の閃き（きたのひらめき）」の販売を開始



研究シーズの事業化支援プログラム  
「北海道BRAVE2025」成果報告会を開催



国際広報メディア・観光学院が  
台湾にて留学生向け説明会を実施



附属図書館北図書館2階アクティブラーニング  
フロアが「Suzuyo Mirai Square」に名称変更

表紙：北海道大学が、知財功労賞 経済産業大臣表彰を受賞（関連記事18頁に記載）

裏表紙：キャンパス懐古⑭ エルムが緑葉を広げ始めるメインストリート南端（1964年5月）

## ■全学ニュース

# 春の叙勲に本学から6氏

この度、本学関係者の次の6氏が、令和8年春の叙勲を受けることについて、4月29日（水・祝）に発表となりました。

勲章	経歴	氏名
瑞宝中綬章	名誉教授（元 大学院情報科学研究科長）	本間利久
瑞宝中綬章	名誉教授（元 大学院教育学研究科長・教育学部長、 教育学研究院長・大学院教育学院長）	鈴木敏正
瑞宝中綬章	名誉教授（元 大学院文学研究科長・文学部長）	瀧川哲夫
瑞宝中綬章	名誉教授（元 大学院メディア・コミュニケーション研究院教授）	吉田徹也
瑞宝中綬章	元 事務局長	村田直樹
瑞宝単光章	元 北海道大学病院看護部 看護師長	石川薫

各氏の長年にわたる教育・研究等への功績と我が国の学術振興の発展に寄与された功績に対し、授与されたものです。各氏の受章にあたっての感想、功績等を紹介します。

（社会共創部広報課）



ほんま としひさ  
本間 利久 氏

### 感想

この度は、春の叙勲の栄誉を賜り、誠に光栄に存じます。これもひとえに北海道大学入学以来、ご指導いただいた諸先生、先輩、同僚、後輩、職員など多くの方々のご協力とご支援の賜物と心から感謝申し上げます。

工学部電気工学科電気応用工学講座に籍を置かせていただいた卒業研究・修士課程では、講座担当の坂本三郎先生のお勧めにより工学部原子工学科エネルギー変換工学講座の小澤保知先生のもとで交流型の電磁流体力学（MHD）発電の研究を行いました。これは、高速流導電性物質と3相交流移動電磁界との相互作用による交流型直接発電ですが、導電性物質として完全電離プラズマに興味を抱き、小澤先生のご推薦で電気工学科系統工学講座担当の加地郁夫先生のもとで、電気試験所（後の電子技術総合研究所）の鬼頭正史先生にもご指導をいただき、核融合プラズマのMHD安定性に関する研究を博士課程で行いました。博士課程修了時の1975年、工学部情報工学専攻情報システム工学講座の助手に任用され、これまでと異なる専門分野ですが、田川遼三郎先生をはじめとする関連研究室での情報・計算機工学関係のセミナーは大変新鮮なものでした。

学位を取得した3年後、深井一郎先生担任の電気工学科電気回路学講座において講師・助教授に昇任し、環境電磁

工学に関する研究後、電気磁気学講座に配置替えとなり、1987年同講座教授となりました。1925年設置の同講座の先達である諸先生を想うとき、身の引き締まる思いでした。講座の研究分野として、計算機による電気磁気学の数値解析とその設計応用及びその国際共同研究も視座に入れることにしました。優秀な講座のスタッフと学生のおかげで数多くの研究論文を発表し、国際共同研究及び国際会議も主宰し、講座の研究活動が充実してきたとき、文部省在外研究員として米国マサチューセッツ工科大学（MIT）航空宇宙学科での研究の機会を得ることができました。MIT滞在中は、宇宙推進機の研究と同時に毎週水曜日開催の学内外のゲストを招いた学科昼食会に参加し、産軍官学・NASAとの共同研究協力の在り方及び世界の宇宙関連の研究動向等に触れ、さらに学科運営の一端を垣間見ることができました。

帰国後の1997年、工学部の大学院重点化が完了し、電気工学科の廃止と新設のシステム工学科の学科長を務めた時期に、全学の国際交流委員長と総長補佐を仰せつかり、北海道大学の主導する特徴ある活動として、今日も継続されている北海道大学・ソウル大学間シンポジウムの第1回の1998年開催及び森林火災国際共同研究を中心としたSDGsにつながる北方生物圏フィールド科学センターの2001年設置に携わったことが思い出されます。

21世紀に入り情報系研究科設置の機運が高まるなか、国立大学法人化の2004年、工学研究科の諸先生のご理解とご協力のおかげで、学部を共通とした情報科学研究科の新設が決まり、情報科学の教育研究組織と管理運営体制を教職

員が一致協力して築き上げられたことは、大変嬉しい限りです。さらに、情報系の高度人材育成プログラムとして、産業界と連携した国際標準のプロジェクトマネジメント（PM）のカリキュラムを全国に先駆けて実施し、黎明期のPMの発展に足跡を残すことができました。

最後に、これまでお力添えをいただきました皆様に改めて心から感謝を申し上げますと共に、北海道大学の更なる発展をお祈り申し上げます。

**功績等**

本間利久氏は、昭和50年7月北海道大学工学部助手として任用され、同54年同大学工学部講師、同55年4月同大学工学部助教授、同62年4月同大学工学部教授に昇任し電気工学科電気磁気学講座を担当された。平成9年4月北海道大学大学院工学研究科教授に配置換え、同16年4月同大学大学院情報科学研究科教授に配置換えとなりシステム情報科学専攻システム融合学講座・システム共創学研究室を担当された。平成23年3月31日定年により退職され、同年4月1日に北海道大学名誉教授の称号を授与されている。平成23年4月1日から同24年3月31日まで北海道大学大学院情報科学研究科特任教授として研究科の発展に努められた。

大学の管理運営面に対しては、平成11年4月1日総長補佐に任命され、大学の組織運営の発展に尽力された。平成16年4月1日新設された北海道大学大学院情報科学研究科の初代研究科長に任命され、新研究科の運営体制、新棟の管理体制、産学連携推進の新たな研究・教育組織とグローバル水準のカリキュラム導入と編成に尽力され、法人化後の研究科組織運営の礎を築かれた。

人材育成面では、昭和54年から平成23年までの在職中、学士・修士・博士課程の教育・研究指導に携わり、多くの優秀な人材を産業界・学界に輩出した。

研究面では、核融合プラズマの電磁流体力学モデルの理論とその数値解析の研究に従事され、さらにコンピュータを用いて創成期にあった計算電磁気学の研究に注力された。また、森林火災防止の国際プロジェクト研究から、プロジェクトマネジメントの研究に取り組まれた。それぞれの研究成果は多数の学術論文・学会講演として発表され、出版された共著「数値電磁力学」は、学会から表彰を受けている。

学外において、国際会議COMPUMAG、国際シンポジウムISEM、境界要素法国際会議、日本・ハンガリー合同セミナー、日本・中国境界要素法シンポジウム、北海道大学・ソウル大学間サテライトセミナーを主宰され、電気学会、日本AEM学会、境界要素法研究会(日本計算数理工学会)、プロジェクトマネジメント学会で役員・委員長等を務められ、国際交流・社会への学術・技術の普及にも尽力された。

以上、学生の教育、学術研究の発展、本学の管理運営、並びに複数の学協会におけるその功績は真に顕著である。

**略 歴**

生 年 月 日 昭和22年9月26日  
 昭和62年 4月 北海道大学工学部教授  
 平成元年 〕北海道大学工学部電気工学科長  
 平成 2年  
 平成 6年 8月 〕文部省在外研究員（米国マサチューセッツ工科大学）  
 平成 7年 5月  
 平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科教授  
 平成 9年 4月 〕北海道大学工学部システム工学科長/電気工学科長  
 平成10年 3月  
 平成11年 4月 〕北海道大学総長補佐  
 平成12年 3月  
 平成16年 4月 北海道大学大学院情報科学研究科教授  
 平成16年 4月 〕北海道大学大学院情報科学研究科長  
 平成18年 3月  
 平成23年 3月 定年退職  
 平成23年 4月 北海道大学名誉教授  
 平成23年 4月 〕北海道大学大学院情報科学研究科特任教授  
 平成24年 3月

(情報科学研究院)



すずき としまさ  
鈴木 敏正 氏

**感 想**

思えば遠くに来たものだとも、この道しかなかったのかなとも考える。

今回のことを喜んでくれるのは、亡き父母かもしれない。私の故郷は静岡県庵原郡由比町（現静岡市）入山桜野、桃源郷のような集落名である。山間農業をしながら私を育ててくれた父母の苦勞に報いんと、京都大学農学部農林経済学科へ入学した。しかし、2年後からは大学紛争時代、卒論では、都市住民と農民の「対立」の代表例＝地価問題に取り組んだ。就職できず大学院に入ったが、研究者になるつもりはなく、革新自治体・京都府の農業政策づくりのための調査活動などに励んだ。それでも修士論文は書かねばならず、当時の焦点＝農産物「過剰」問題をテーマに選んだ。「でもしか」で博士課程に進んだ結果が、博士論文「不足払法化の牛乳過剰の展開メカニズムに関する研究」である。

ふとしたことから、鳥根大学農学部農業市場経済学講座助手に採用された。山陰農山漁村を駆け回りつつ、夏は北海道の転作水田に始まり、冬は鹿児島大隅半島の菜の花畑を見て一年が終わるといった生活であった。そうした中で、北海道大学教育学部社会研究室から誘われた。迷ったが、この研究室では美土路達雄先生と山田定市先生を中心に、基礎構造＝農業生産力分析に基づく農民・農村教育論に取り組んでおられた。農法論・農業技術論の論文は書いたことはあり、当時テーマにしていた農民分解論をベース

にすれば、なんとかやっていけるのではないかと思った。1981年のことである。ただし、社会教育学は未知数、「5年居るべし、10年居るべからず」のつもりであった。

その10年が迫り、農民教育論を超えた、私なりの社会教育学が求められた。社会教育の本質は地域住民の自己教育・相互教育であるという理解のもと、拙著『自己教育の論理』（1992年）をまとめた（北海道大学博士論文）。国際比較研究も必要だと考えていた時、幸いにも文部省在外研究の機会があり、日本の周辺・北海道との対比のために、ヨーロッパの周辺・英国北アイルランドにあるアルスター民衆大学を選んだ（拙著『平和への地域づくり教育』、1995年）。

その後は、それらの発展とも言える。まず、北海道発の社会教育学として拙編集代表『講座 主体形成の社会教育学』全4巻を編み、私なりの理論を拙著『主体形成の教育学』（2000年）、国際動向をふまえた実践論を同『エンパワーメントの教育学』（1999年）で提示した。全国的な集团的調査研究も試みた（拙編集代表『叢書 地域をつくる学び』全14巻）。ヨーロッパを視野に入れた北アイルランド研究は拙著『地域づくり教育の誕生』（1998年）にまとめたが、日英共同研究の成果は拙編著『社会的排除と「協同の教育」』である。その後、日英韓比較研究に広げた結果は、拙編著『排除型社会と生涯学習』及び鈴木・姉崎編著『持続可能な包摂型社会への生涯学習』として公刊した（2011年）。この間に、戦後北大発の教育学を拙著『現代教育計画論への道程』（2008年）、子ども・学校教育学を同『教育学をひらく』（2003年、新版2009年）、社会教育学・成人教育論を同『生涯学習の教育学』（2004年、新版2008年、増補改訂版2014年）として上梓した。

私にとって大きな転機は日本社会教育学会会長の時、東日本大震災との遭遇である。学会では特別プロジェクトに取り組んだが（日本社会教育学会編『希望への社会教育』、同『東日本大震災と社会教育』）、人間的復興と自然再生活動に学んだ拙著『持続可能な発展の教育学』（2013年）及び同『将来社会への学び』（2016年）を提起した。拙著『「コロナ危機」を乗り越える将来社会論』（2020年）は、それらの拡張でもある。その後は、北海学園大学客員研究員としてSDGs時代さらに人新世末期の政治社会経済理論の課題と「実践の学」創造を提起しながら、後輩たちと教育学や社会教育学・生涯学習論のテキストづくりをしている。

この機会に、これまで私の調査研究・教育・社会活動を支えていただいたすべての皆さんに深甚の謝意を評したい。

### 功績等

鈴木敏正氏は、昭和50年7月に鳥根大学農学部助手として任用され、同大学助教授を経て、同56年7月に北海道大学教育学部助教授に就任した。平成8年4月に北海道大学教育学部教授に昇任され、同12年4月に北海道大学大学院教育学研究科教授に配置換となった。平成23年3月に定年退職され、同年4月に北海道大学名誉教授の称号を授与されている。

研究の面では、学的基盤が不確かとされてきた社会教育学において、農業経済学研究を出発点としつつ、「主体形成」概念を基軸とした新たな社会教育学体系化に取り組み、主体形成論を主体形成の社会教育学へと発展させた。それは、地域の社会教育実践に基づきながらも、実践に呼応する理論を体系化するものであり、数多くの地域で行われたフィールドワークの成果に立脚している。抽象的な理論構築のみならず、社会教育実践論の展開にも精力的に取り組み、 「持続可能で包容的な地域づくり教育」論など、多数の研究成果を公にしてきた。著書として、単著21冊と共著32冊、編著7冊と共編著15冊の合計75冊があり、研究成果の発信に積極的に取り組まれた。同氏の研究業績は、その時代時代での本質的な問題に挑戦するものばかりであり、質量いずれの面においても卓越しており、学界に大きく貢献する代表的な研究者として高く評価されている。

同氏はまた、関連する専門分野の学会の発展にも大きく貢献された。日本社会教育学会では、常任理事を9期務められたほか、同学会の副会長、学会長を歴任し、中心的役割を担ってこられた。さらに、日本環境教育学会では、北海道支部長、北海道支部顧問として活動されている。

教育の面においては、学問的に厳しい姿勢を持ちながらも朗らかな人柄で多数の学生・大学院生を育ててこられた。学部ゼミ・大学院ゼミでは多くのフィールド・幅広い人脈を生かして指導にあたられ、研究者から自治体職員・社会教育実践者まで、多くの学生・大学院生を世に輩出した。

学内運営においては、北海道大学評議員、教育学研究院長等を歴任された。

以上のように、同氏は、学術研究の発展、学生教育並びに北海道大学の運営に大きく貢献され、その功績は誠に顕著である。

### 略 歴

生 年 月 日	昭和22年10月27日
昭和50年 7月	鳥根大学農学部助手
昭和54年 8月	鳥根大学農学部助教授
昭和56年 7月	北海道大学教育学部助教授
平成 8年 4月	北海道大学教育学部教授
平成17年 5月	北海道大学大学院教育学研究科長
平成19年 4月	
平成23年 3月	定年退職
平成23年 4月	北海道大学名誉教授
平成23年 4月	北海道大学大学院教育学研究院特任教授
平成24年 3月	
平成25年 4月	札幌国際大学人文学部教授
平成28年 3月	
平成28年 4月	北海道文教大学人間科学部教授
令和 3年 3月	

(教育学研究院)



たきがわ てつお  
瀧川 哲夫 氏

### 感想

この度の叙勲は身に余る光栄でございます。いろいろとご配慮いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

32年にわたる北海道大学奉職時代はすべてが忘れ得ぬ思い出となっています。赴任した1980年代の北大文学部行動科学科の心理学・社会心理学研究室は、戸田正直教授・寺岡 隆教授・相場 覺教授・山岸俊男助教授らの世界をリードする研究者を擁して、活発な討論の機会が日常としてありました。私自身の推論研究では、実験ゲームを用いた方法論で海外との共同研究が始まり、退職に至るまで、研究と教育の充実した毎日を札幌の豊かな自然の中で過ごすことができました。

1990年代に入ると、全学の委員を務めるようになりました。学生委員として、女子寮が少ないので空室の多かった恵迪寮に女子を入れる提案をして恵迪寮生諸氏と話し合ったり、北大生の生活紹介広報誌を製作したり、広報委員として、学外向け広報誌「リテラポプリ」を創刊したり、などなど、北大ならではの委員職務をむしろ楽しんでおりました。

一方、文学部も大学院重点化という組織改編計画が進められることになりました。当時の行動科学専攻では常に定員を超えた大学院進学希望者がいて、他専攻の空き定員枠を融通してもらっていたので、大学院重点化は望ましい方向と感じていました。しかし、120人を超える教員を擁する文学部では賛成意見ばかりとは言えませんでした。そういう雰囲気の中で評議員となり、2000年4月の重点化に合わせて部局長（文学研究科長で学部長を兼任）を務めることになりました。奇しくも、その年は文学部創立50周年にあたり、その記念式典は、部局ではなくなった文学部の象徴的な出来事となりました。

2000年代は大学院重点化に加えて国立大学法人化が実施され、戦後最大の国立大学運営方法の変化でありました。その過渡期の作業の一端を担ったことは、とても大変でしたが、大学紛争世代としては二度目の、大学のあり方を考える貴重な機会となりました。これからも改革は常に続くのですが、北海道大学がより魅力的な研究・教育環境になっていくことを衷心より願っております。

### 功績等

瀧川哲夫氏は、昭和22年に京都市に生まれ、同45年に関西学院大学文学部心理学科を卒業後、同大学院修士課程を修了し、同50年3月に博士課程を単位取得退学（平成2年2月に文学博士）し、同年4月に親和女子大学（現・神戸親和大学）文学部専任講師に採用された。昭和55年4月に北海道大学文学部専任講師（比較行動学講座）に採用され、同60年11月に同助教授、平成7年4月に同教授、同12年4月

に北海道大学大学院文学研究科教授となり、同23年3月31日をもって定年により北海道大学を退職し、同年4月北海道大学名誉教授の称号を授与された。平成23年4月に北海道大学大学院文学研究科特任教授に採用され、同24年3月に退職した。

同氏の研究分野は認知心理学、特に思考・推論・判断過程の実験分析を専門とし、帰納的推論研究の方法論として実験ゲームの手法を用い、対人関係の中での推論過程を分析してきた。特に、共有資源利用におけるグループサイズの不確定性に関する国際共同研究、そして、不完全情報型の二人ゲームをモデル化したハイパーゲーム過程の詳細な分析は学会から高く評価された。

教育面では、全学（一般）・学部・大学院を通じて心理学関係の授業科目を担当し、全学教育総合科目では北海道大学初のジェンダー授業を企画・担当するなど、常に学生を啓発・薫陶し続けてきた。また、学会運営においては、北海道心理学会会長、日本認定心理士会北海道・東北支部支部長などを務めた。

同氏は北海道大学に在職した30年あまりの間、全学学生委員会、広報委員会等の委員・委員長を歴任し、平成10年から評議員、そして文学部創立50周年を迎えた同12年4月から大学院重点化した文学研究科の初代文学研究科長（学部長兼務）を務め、その後は北海道大学学生相談室長、留学生センター長、評価室役員補佐を歴任し、文学研究科並びに全学の組織運営において多大な貢献をされた。

さらに、同氏は北海道大学在職中から退職後も継続して学外機関の委嘱を受けて、他大学の研究者とともに非行・防犯に関する実態調査を継続的に実施し、様々な提言を行うなど、学術専門性を活かした社会貢献活動においても高い評価を受けている。

以上のように、同氏は多年にわたって北海道大学の教育・運営に貢献され、研究において極めて優れた業績を残され、社会貢献活動でも活躍された。

### 略歴

生年月日	昭和22年10月16日
昭和55年 4月	北海道大学文学部講師
昭和60年11月	北海道大学文学部助教授
平成 7年 4月	北海道大学文学部教授
平成10年 2月	北海道大学評議員
平成12年 3月	
平成12年 4月	北海道大学大学院文学研究科教授
平成12年 4月	北海道大学大学院文学研究科長・学部長
平成14年 3月	
平成14年 4月	北海道大学留学生センター長
平成16年 3月	
平成16年 4月	北海道大学役員補佐
平成21年 3月	
平成23年 3月	定年退職
平成23年 4月	北海道大学名誉教授
平成23年 4月	北海道大学大学院文学研究科特任教授
平成24年 3月	

（文学研究院）



よしだ てつや  
吉田 徹也 氏

### 感想

この度の思いがけない叙勲に身の引き締まる思いです。ご支援いただいた皆様のおかげと心よりお礼申し上げます。

東大安田講堂のニュースを見ながら大学院入試に臨んだ世代として、私たちは学生によるプロテストの中で院生時代を過ごす定めでした。研究対象がドイツに関わるとどうしてもナチズムとホロコーストから逃れることはできません。ある日緊張関係にあった恩師から電話がありハーバーマスの綴りを聞かれたことがありました。ナチズム批判の急先鋒とみなされていたハーバーマスは私たち全体を結びつけてもいたのです。教師として北大に戻り、やがて昨春秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章された筑和正格氏らの尽力で設立された大学院では、論文のテーマにホロコーストによる少数民族の迫害を選ぶ院生も現れました。ホロコーストは途方もない広がりを持ち、今も癒えることのない深い傷跡を残したのです。

院生時代から関心を寄せてきた哲学者ユルゲン・ハーバーマスは今年の3月に亡くなりましたが、彼の語る姿を北大文学部の会議室で見ることができたのも遥かに遠い出来事になってしまいました。希代の思想家の講演を聞こうとつめかけた聴衆が経験したのは、参加者とハーバーマス間の相互の質疑応答でした。ハーバーマスからの問いはなんと「町内会」とは何か、だったのです。日本中に張りめぐらされているというこの組織が当日の中心的話題となるとは誰も予想だにしなかったはずです。ハーバーマスの問いかけは一見些事とも見えますが、この国の行政にゆるく組み込まれている組織を支えている私たちのアイデンティティにも関わる問題であるかもしれません。

ハーバーマスの死によって失われたものへの哀悼の声とならんで、その眼差しにはパレスチナの人々への配慮が欠如していたとの批判も聞かれました。過去の出来事への誠実な姿勢が、逆に現前の出来事を見る目を曇らせるほどの呪縛力に転化する過程を私たちは見ているのでしょうか。文学部の会議室での数時間の興奮が今も鮮やかによみがえります。

### 功績等

吉田徹也氏は昭和21年北海道に生まれ、同44年北海道大学文学部を卒業、北海道大学大学院文学研究科を修了後、弘前大学講師・助教授を経て、同55年北海道大学文学部助教授、同59年言語文化部助教授、平成6年同教授、同19年大学院メディア・コミュニケーション研究院教授となり、同21年に定年退職され、名誉教授の称号を授与されている。

同氏は、昭和46年より弘前大学で、同55年より北海道大学教養部・言語文化部・外国語教育センターでドイツ語教育に従事された。また、平成12年度からは大学院国際広報

メディア研究科で「現代欧州文化論」、同19年度から国際広報メディア・観光学院で「多様社会相関論」を担当し、院生指導にも尽力された。

研究面では、昭和51年から同52年にドイツ学術交流会奨学生としてボン大学・マールブルク大学に留学し、さらに平成9年及び同11年から同12年にミュンヘン大学で日独交流史・ドイツ語教授法の深化に従事された。主な研究領域はゲーテとベンヤミンを中心とするドイツ文学及び現代思想で、ゲーテの近代精神批判と、ナチズムに抗したベンヤミンの思想を総体的に位置づけられた。特にベンヤミンの批評概念の展開を多角的に検証し、『パサーージュ論』解説を通じて西欧近代の問題を照射した業績は高く評価された。また新しい思想潮流を文学史・思想史に適切に位置づけた点も顕著である。

さらにハーバーマス研究では、テキストの誤読に基づく批判の横行に対抗し、コミュニケーション的理性に基づく民主主義理論の正確な解明に基づく市民像を提示してグローバル市民社会論の発展に寄与された。平成9年度以降はメタファー研究会にも参加され、新理論構築に貢献された。

平成9年以降、ドイツ語ドイツ文学振興会論文審査委員、文部省学術審議会専門委員、北海道ドイツ文学会会長・日本独文学会北海道支部長を務められ、同16年日本独文学会秋季大会では実行委員長を担当された。平成2年国際ゲルマニスト会議ではコーディネーター及び座長として貢献され、同15年には韓国独文学会主催の三国研究会に日本代表として参加された。

以上のように、同氏のドイツ文学・思想史研究及び教育への貢献は誠に顕著である。

### 略歴

生年月日	昭和21年2月16日
昭和46年 4月	弘前大学教養部講師
昭和53年 4月	弘前大学教養部助教授
昭和55年 4月	北海道大学文学部助教授
昭和59年 4月	北海道大学言語文化部助教授
平成 6年 3月	北海道大学言語文化部教授
平成12年 4月	北海道大学大学院国際広報メディア研究科教授
平成19年 4月	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授
平成21年 3月	北海道大学定年退職
平成21年 4月	北海道大学名誉教授

(メディア・コミュニケーション研究院)



むらた なおき  
村田 直樹 氏

感想

この度、叙勲の栄を賜り身に余る光栄と存じております。昭和53年に文部省に入省以来、多くの上司、先輩、同僚、部下に恵まれ、家族に支えられながら、有意義な公務員生活を全うすることができ、今回の叙勲に至ったものと心より感謝しております。

私は平成24年9月に北大の理事・事務局長に就任しました。着任当初は佐伯 浩先生が総長でしたが、平成25年4月から山口佳三先生が総長に就任され、私は平成27年8月に退任するまでお任せしました。文部科学省では高等教育局の室長、課長、審議官として大学行政に携わるとともに、横浜国立大学で事務局長としての実務経験もありましたが、直前のポストが外務省広報文化交流部長ということで、直近の大学政策の動向などを十分把握しないまま着任しました。

文部科学省の政策に沿った改革を進めないとい国の運営費交付金は増えず、様々な競争的資金にも申請する必要があり、めまぐるしいスピードで大学が動いていました。また、当時は官民格差の是正やデフレ下での給与等の改訂があり、組合との交渉が難航することもありました。それに加えて、研究費の不正使用が発覚し、不正内容を精査した第三者委員会の報告に基づいて、多くの教員の処分を決める必要があり、連日教育研究評議会が開催されました。北大での勤務を通じて、法人化後、文部科学省と各国立大学との間に良き緊張関係がなくなり、上意下達的な傾向が強くなったように感じたこともありました。

私は教員の真似事をするのが好きで、北大に着任した時には、桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科と長岡技術科学大学教職課程でそれぞれ教育関係の授業科目を担当していました。研究面では英国の高等教育改革の動向、特に高等教育の質保証の仕組みをフォローしており、平成24年3月に放送大学で修士号を取得しました。平成27年に北大を離れる時に、放送大学が博士課程を創設することになり、その一次試験を北大併設の放送大学学習センターで受験し、平成29年に博士号を取得することができました。横浜国立大学で事務局長をしていた時に、事務職員の能力向上を企図して「横浜国大職員塾」を主宰したのですが、北大では優秀な若手職員が多かったので、対象を部課長に絞りました。当時は大学の国際化を進めることが課題となっていたこともあり、部課長に英語に親しんでもらおうと、部課長会議で教育関係の英文資料を事前に配付し、後日その理解度をチェックするテストを実施しました。

私生活の面では、春になると事務局長宿舎の庭に水仙、クロッカス、チューリップが一斉に咲くことに感動しました。これをきっかけに北海道のガーデンめぐりや山野草を求めての山歩きが趣味になりました。今でも春から秋にか

けて、北海道で山歩きを楽しんでいます。

北大での勤務を通じて、多くの先生方、職員の皆さんと親交を深めることができ、公私を通じて多くのことを学ばせていただきました。改めて感謝申し上げます。

功績等

村田直樹氏は、横浜国立大学事務局長在職時には、「横浜国立大学事務職員能力向上4カ年計画」を策定したほか、新たな研修プログラム「横浜国大職員塾」を開催し、自らの講義と事務職員の課題研究を通して、職員の事務・企画提案能力の向上に努められた。

独立行政法人日本学術振興会理事在職時は、予算、労務管理、渉外・広報等に係る業務に貢献され、特に若手研究者育成に向けた取り組みに注力し、平成21年度に同会に初めて創設された基金により、若手研究者の海外派遣を集中的に推進する事業を開始し、日本学術振興会法等の根拠法令の改正に加え、基金を適切に運用するために指揮を執り、基金運用体制の構築や制度面の整備に尽力された。

外務省大臣官房広報文化交流部長在職時は、対市民外交の手段である海外広報と文化交流を総合的に推進し、効果的に日本に対する理解や信頼感を高め、各国との交流を促進するとともに、海外における対日認識を調査・分析し、各国・地域の特性を踏まえながら、日本の政策及び社会、文化といった幅広い一般事情に関し、積極的に海外への情報発信を行われた。

北海道大学理事・事務局長在職時は、全学の事務職員を指揮され、多様な業務を適正に執行し、大学の中核として佐伯 浩、山口佳三、両総長を側面から補佐し、大学の発展に尽力された。

平成25年度には、本学のグローバル化をより一層推進するため、新たな学士課程の特別教育プログラムである「新渡戸カレッジ」を開校し、また、同26年度には、国際連携研究教育局の設置に尽力し、国際連携研究・教育の推進と世界の課題解決に貢献するグローバル頭脳循環拠点を構築され、さらに同27年度には、北極域研究センターを設置し、課題解決型研究を推進する体制を構築するとともに産学・地域協働推進機構を設置し、研究成果の社会実装を目的とする産学連携、地域協働を推進された。

以上のように同氏は、永年にわたり文部行政、学術行政の進展に精励され、その功績はまことに顕著である。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年2月28日
昭和53年 4月	文部省学術国際局ユネスコ国際部国際教育文化課
昭和56年 6月	文部省学術国際局学術課
昭和57年 4月	文部省学術国際局学術課学術振興係長
昭和58年 7月	文部省大臣官房企画室教育計画係長
昭和59年 7月	文部省大臣官房政策課教育計画係長
昭和59年 8月	文部省大臣官房政策課専門職員 (兼) 総理府臨時教育審議会事務局総務課資料係長
昭和60年 9月	文部省学術国際局国際企画課専門職員
昭和61年 2月	外務省在イギリス日本国大使館二等書記官

昭和63年 4月 外務省在イギリス日本国大使館一等書記官  
 平成元年 5月 文化庁文化部芸術課課長補佐  
 平成 3年 6月 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課長  
 平成 6年 6月 文部省高等教育局大学課大学改革推進室長  
 平成 9年 7月 文部省高等教育局私学部私学助成課長  
 平成11年 7月 文部省高等教育局私学部私学行政課長  
 平成13年 4月 文化庁長官官房国際課長  
 平成14年 8月 文部科学省大臣官房国際課長  
 平成16年 7月 文部科学省科学技術・学術政策局科学技術・学術総括官  
 平成17年 4月 横浜国立大学事務局長  
 平成18年10月 文部科学省大臣官房審議官（高等教育局担当）  
 平成19年 7月 独立行政法人日本学術振興会理事  
 平成22年 7月 文部科学省大臣官房付  
 平成22年 8月 外務省大臣官房広報文化交流部長  
 平成24年 8月 文部科学省大臣官房付  
 平成24年 9月 } 北海道大学理事・事務局長  
 平成27年 8月 }

（総務企画部人事課厚生労務室）



いしかわ かおる  
**石川 薫 氏**

### 感想

この度、令和8年度春の叙勲の栄誉を賜り、身に余る光栄に存じます。これもひとえに、多くの皆様のご指導、ご支援の賜物と、心

より感謝し、御礼申し上げます。

私は、北海道大学医学部附属看護学校を昭和58年に卒業後、39年間、北海道大学医学部附属病院で定年まで勤務させていただきました。

最初に配属された第二外科病棟では、消化器・心臓血管・呼吸器疾患患者さんへの周術期看護を経験しました。先輩や医師の支援を受けながら、術後合併症予防や管理を行いながら、忙しく走り回っていた日々を思い出します。同時に「この仕事を続けていけるのか、続けていってよいのか」と挫折感を覚えることもありました。しかし、患者さんの苦痛軽減やQOL向上を意識した看護展開に日々触れ、生活者として患者さんを捉える視点を学ぶことができ、患者看護を考える基盤となりました。小児科病棟では、成長段階に応じて病気や治療の意味を理解しながら懸命に闘う患児の姿に触れ、入院生活が成長に与える影響や、患児との向き合い方を考えさせられました。その後、副看護師長として内科・外科・総合外来を経て異動した第一内科病棟では、肺がん患者さんや慢性呼吸器疾患患者さんの看護を学びました。当時は、予後の悪い肺がん患者さんへのがん告知は一般的ではありませんでしたが、告知のあり方や告知後の支援について医師と話し合いを重ね、患者さんの権利尊重や患者さんとそのご家族の意思決定支援の重要性を実感し、その後の看護に活かすことができました。リハビリテーション病棟では、神経難病患者など障害

を抱えた患者さんの看護を経験し、年齢を問わずその人らしい生活を続けられるよう、残された機能を活かし退院後の生活環境に合わせた支援の重要性、多職種との協働、そして社会資源の活用を学びました。

その後、眼科病棟、循環器外科・消化器外科病棟で看護師長として看護管理を経験しました。リハビリテーション病棟で看護師長となった際は、病床の効果的な活用と診療科を特定せずに入院できる共通床の運用、そして人材育成が大きな課題でした。共通床の導入により、病棟の半数近くを数診療科の患者さんが占めることになり、これまでの専門とは異なる看護を行うことに対する看護師の不安や戸惑いも多くありました。しかし、副看護師長と共にこの状況を新たなチャンスと捉え、学習の機会を設けながら、患者さんの望む生活を共に考えられるスタッフの成長を支援してゆきました。その後、眼科病棟、循環器外科・消化器外科病棟で勤務する中で、社会の変化や看護の変革期で求められる課題はその後も続きましたが、看護師長として何をすべきかを常に考え、取り組んできました。苦労もありましたが、スタッフの成長や患者さんの笑顔が私の支えでした。

最後に改めて、ご指導くださった諸先輩方、同僚、後輩、患者さんとそのご家族の皆様にご心から感謝申し上げますとともに、北海道大学、北海道大学病院、看護部のご発展を祈念し、感謝の言葉といたします。

### 功績等

石川 薫氏は、北海道名寄市に生まれ、昭和58年3月に北海道大学医学部附属看護学校を卒業後、同年4月に北海道大学医学部附属病院に採用された。平成6年4月に副看護婦長、同20年4月に看護師長を歴任し、令和4年3月に北海道大学病院を定年にて退職するまで、臨床看護、看護管理及び看護教育の発展に多大な貢献を果たした。

同氏は採用後、第二外科病棟では消化器、心臓血管、呼吸器疾患患者の周術期看護に従事し、術後合併症予防や疼痛緩和に関する術後管理を意欲的に取り組み、その成果を学会等で発表した。小児科病棟では、当時開始されたばかりの骨髄移植医療における無菌管理体制や看護基準の整備に携わった。また、子どもの意思を尊重した看護を実践し、子どもの権利擁護に取り組んだ。優れた看護実践力が認められ、副看護婦長に昇任し、総合外来では内科及び外科外来から内視鏡検査室まで広範な部門を担当し、外来看護師が継続的に在宅療養支援を実践できるよう部署内教育に取り組んだ。第一内科病棟では肺がん患者や慢性呼吸器疾患患者への意思決定支援及び終末期看護の質向上に尽力し、その成果を複数の学術学会で発表した。リハビリテーション病棟では高次脳機能障害者支援や地域連携、人材育成に取り組んだ。これまでの優れた看護管理能力が認められ、看護師長に昇任し、共通床運用や業務標準化の推進、病院運営に寄与した。その後も眼科及び外科系病棟において医療安全対策やERAS（Enhanced Recovery After Surgery、術後回復促進プログラム）導入を進め、看護の

質向上に大きく貢献した。看護記録検討委員として患者参加型看護の評価及び看護記録の質向上に取り組み、その成果を学会で発表した。

院外での取り組みも積極的に行っており、看護管理者研修等を受講して管理能力の研鑽に努めるとともに、北海道リハビリテーション看護研究会役員、北海道看護協会札幌第4支部看護師職能委員、日本がんリハビリテーション研究会役員を務め地域の看護研究・教育に携わり、看護の質向上と人材育成に長年貢献し、その社会的功績は高く評価されている。

以上のように同氏は、39年の永きにわたり看護の質向上、看護管理及び人材育成に尽力し、その功績は誠に顕著である。

#### 略 歴

---

生年月日	昭和36年5月13日
昭和58年 4月	北海道大学医学部附属病院看護部看護助手
昭和58年 5月	北海道大学医学部附属病院看護部看護婦
平成 6年 4月	北海道大学医学部附属病院看護部副看護婦長
平成15年10月	北海道大学医学部・歯学部附属病院看護部副看護師長
平成20年 4月	北海道大学病院看護部看護師長
令和 4年 3月	定年退職

(北海道大学病院)

## 令和8年度4月採用北海道大学次世代AI博士人材フェローシップ 採用者ガイダンスを開催

4月20日（月）に令和8年度4月採用北海道大学次世代AI博士人材フェローシップ採用者ガイダンスをハイブリッド（対面・オンライン）形式で開催し、令和8年4月採用者15名と令和7年10月採用者1名の計16名が参加しました。

本フェローシップは、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の「国家戦略分野の若手研究者及び博士後期課程学生の育成事業（BOOST）次世代AI人材育成プログラム（博士後期課程学生）」事業に基づくもので、緊急性の高い国家戦略分野である、次世代AI（AI及びAI分野における新興・融合領域）に資する研究に取り組み、将来的に次世代AI分野を開拓・牽引する博士人材を育成することを目的として

いるものです。本年度4月採用者は、第3期生にあたり、本フェローシップとしては、最後の採用となります。

ガイダンスは、石森浩一郎事業統括・副学長による第3期生に向けた激励メッセージで始まり、続いて、第3期生の自己紹介が行われました。その後、石森事業統括・副学長からの本フェローシッププログラムの概要や課せられる義務等についての説明、事務部からの事務手続きに関する説明と本学総合イノベーション創発機構データ駆動型融合研究創発拠点（D-RED）で実施する共同研究に関する説明等が続き、最後は参加者による記念撮影で締めくくりました。

ガイダンスは終始和やかな雰囲気で

行われ、第3期生は真剣な眼差しで説明に聞き入っており、本フェローシッププログラムへの参加意欲の高さがうかがえました。また、ガイダンス終了後も、第3期生同士で談笑する姿が見受けられ、今後、所属学院を越えたフェローシップ生同士の横の繋がりが構築されていくものと思われます。

採用された第3期生には、本フェローシップの支援を受けて、学会発表、論文、産学連携、国際共同研究等に積極的に取り組み、成果を出すことが期待されています。

（学務部学務企画課大学院教育改革推進室）



北海道大学次世代AI博士人材フェローシップ第3期生と関係教員

## 新入留学生オリエンテーションを開催

4月3日（金）に学术交流会館にて、4月入学の外国人留学生を対象とした新入留学生オリエンテーションを開催しました。

本オリエンテーションは、留学生が一日も早く北海道大学での学生生活に慣れ、戸惑いや不安を解消し、新しい環境に円滑に適應できるよう支援することを目的として実施したものです。英語セッションと日本語セッションの2部構成で行われ、31の国・地域から来日した計184名の新入留学生が参加しました。

当日は、学生相談支援センター留学生相談室のカウンセラーによる「文化適應とメンタルヘルスについて」と題したミニ講義をはじめ、日本での学生生活に適應するための様々な情報が提供されました。また、北海道警察及び札幌方面北警察署からは日本の交通ルールやサイバーセキュリティに関する説明が行われたほか、学内からは新渡戸カレッジ、情報セキュリティ対策室、附属図書館、保健センター、キャリアデザインセンターによる講義・紹介があり、さらに留学生サポートデス

クの学生スタッフから各種支援体制についての案内がありました。参加者はいずれの説明にも熱心に耳を傾けていました。

オリエンテーション終了後には、希望者を対象に日本語・英語・中国語の3言語によるキャンパスツアーを実施しました。参加者は、今後学生生活を送るキャンパスを散策しながら、構内施設に関する説明を受けていました。

（学務部学生支援課）



英語でのミニ講義



キャンパスツアーで構内の説明を受ける留学生たち

# 海外ラーニング・サテライト事業合同説明会を初開催

4月9日（木）・10日（金）、本学が採択された大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業「ウェルビーイング社会の実現に貢献するグローバル人材育成（HOKUDAI国際共創の構築）」の今年度からの本格実施にあたり、海外ラーニング・サテライト（LS）事業合同説明会を開催しました。海外LSは、本学教員と海外協定大学が連携し、世界を教育フィールドとして授業科目を実施する派遣型教育プログラムであり、本学学生と海外大学等の学生が共に学ぶ国際共修型の多様なプログラムを展開しています。

今回の説明会には、今年度開講予定の40プログラムのうち、全学部・学院

の学生が参加可能な15プログラムが参加しました。複数分野のプログラム情報を一度に得られる機会を学生に提供しました。

説明会に先立ち、参加プログラム一覧を事前に公開したことで、学生は自身の関心分野や学修計画を踏まえた上で参加することができ、各プログラムの教育内容や実施地域、履修条件等について、より具体的に理解を深める機会となりました。

当日は、各プログラムの担当教員が説明を行い、国際共修の特色や海外実習の内容、学修上の留意点等について紹介しました。また、説明後には質疑応答を行い、学生が教員に直接質問で

きる時間を設けることで、履修に関する不明点や学修内容への理解を更に深める機会となりました。説明会は、1日目は日本語、2日目は英語で実施し、対面に加えてオンライン参加も可能とすることで、多様な学生が参加しやすい環境を整えました。

2日間を通じて、様々な学部及び大学院に所属する102名の学生が参加し、海外LSへの理解を深めるとともに、海外実習や留学に対する関心及び参加意欲の向上につながる説明会となりました。

(学務部国際交流課)



告知フライヤー



説明会の様子



地球環境科学研究所 沖野教授による「熱帯域における環境汚染の現状と対策（インドネシア実習）」の説明



北極域研究センター 杉山教授による「南極学特別実習（スイス実習）」の説明

# 北海道ガス株式会社 × 北海道大学「海外ラーニング・サテライト事業海外研修プログラム」報告会を開催

4月20日（月）、北海道ガス株式会社本社において「海外ラーニング・サテライト事業海外研修プログラム報告会」が開催されました。

「海外ラーニング・サテライト」とは、本学と海外協定大学が連携し、世界を教育フィールドとして海外で共に学ぶ授業プログラムです。

今回、本事業の理念に賛同いただいた北海道ガス株式会社より支援を受け、同社の企業研修の一環として社員が海外ラーニング・サテライトで実施するプログラムに参加しました。企業研修として位置付けたうえで、本学学生と共に実施する共修プログラムは、本取組が初の試みとなります。

今回、企業研修として選定されたのは、獣医学研究院が実施する「One Healthに資する人材育成－ボツワナ共和国の環境、生物、人を包括して（実施地：ボツワナ共和国）」で、2月10日（火）～2月21日（土）に実施されました。

当日は、北海道ガス株式会社の八木渉常務執行役員のご挨拶、教育イノベーション機構の高橋彩国際教育センター長による経緯説明の後、石塚真由美理事・副学長より、海外ラーニング・サテライト事業及び本プログラムの概要説明がありました。

続いて、本研修に参加した同社の奥泉文菜氏と、獣医学院博士課程4年の小笠原浩平氏より企業人と学生それぞれの視点から研修報告が行われました。

奥泉氏からは、本研修を通じて、将来を見据えた運用や事業計画の必要性、多角的な視点から根本原因を追究することの重要性、さらに海外では文化の違いを踏まえた信頼関係構築の重要性について発表がありました。また、前例のない未知の土地へ挑戦することや、実際に現地を訪れ自らの目で確かめることの大切さについても言及がありました。

小笠原氏からは、川、海、土壌などの自然環境中に存在する環境DNAの

現地での調査活動について、現地で採取した水から細菌のDNAを抽出し、野生動物が多く生息する地域と鉱山地域を比較し、目には見えない人間活動の影響を環境細菌の観点から調べた旨、報告がありました。

出席者からは、学生と社会人が共に学ぶ共修の意義について、専門的知識を持った学生から直接意見を得られたこと、また社会人ならではの情報整理や他者への伝え方が大いに参考になったとのコメントがありました。

その後、同社の大槻博代表取締役会長より今後の展望を含めた講評が述べられ、報告会は終了しました。

教育イノベーション機構では、今後も全学の国際化と学生のグローバルな視野の拡大を促進するとともに、地域や企業との連携を一層強化し、新たな国際共創のロールモデルとなる事業展開を推進してまいります。

(学務部国際交流課)



奥泉氏による発表



小笠原氏による発表

# 北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）

北海道大学は、創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に北大フロンティア基金を創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、息の長い募金活動をする事としています。

2026年、北海道大学は創基150周年を迎えます。次の150年を見据えた記念事業のため、2023～2026年度の4年間、北大フロンティア基金は「創基150周年記念募金」として、皆様からのご寄附を募集しております。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金創設時累計	(3月31日現在) / 60,388件	11,397,521,603円
うち、北海道大学創基150周年記念募金累計	(3月31日現在) / 23,340件	5,232,753,046円

## <ご寄附状況>

3月は454件557,267,533円のご寄附を賜りました。この結果、創基150周年記念募金は、皆様のご厚志により、目標額である50億円という大きな節目を達成することができました。そのご厚志に対しまして、心より感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名を掲載させていただきます（五十音別・敬称略）。

## 寄附者ご芳名（法人等）

株式会社安藤忠雄建築研究所、エーワイハッピー株式会社、エス・ピー・シー・コーエー株式会社、医療法人オーアールシー川崎歯科医院、株式会社オータカ建設、カフェパサパ、一般財団法人協済会、株式会社共同文化社、株式会社熊谷組、医療法人溪仁会、株式会社越山ビルディングズ、札幌定温運輸株式会社、札幌テレビ放送株式会社、一般社団法人札幌農学同窓会、サンワード証券株式会社、医療法人スワンアイクリニック、株式会社竹山、一般社団法人炭素会計アドバイザー協会、千代田サービス販売株式会社、株式会社月寒製作所、月島JFEアクアソリューション株式会社、株式会社つば八、株式会社道新文化センター、東邦産業株式会社、株式会社DoshinEC、中銀インテグレーション株式会社、株式会社西川工務店、株式会社バルカー、株式会社ホクリヨウ、北海道ガス株式会社、一般財団法人北海道環境科学技術センター、北海道漁業協同組合連合会、株式会社北海道グリーンメンテナンス、北海道大学医学部同窓会、北海道大学歯学部同窓会、本間塗装株式会社、メンズプラザウヤマ、横関建設工業株式会社、LOVE・K・CAFE、ワコオ工業株式会社

## 寄附者ご芳名（個人）

藍 洋一	合川 正幸	青井 良平	青木 俊介	青木 宏行	浅沼 佳南	小豆畑二美夫	阿部 雅史
安齋 洋一	井口 光雄	池田 勉	石井 哲夫	石井 仁	石井ひろみ	石川 恵美	石川三千雄
石戸谷 繁	石野 悟司	石渡 英夫	泉屋 繁	市村 優	伊藤 利文	伊藤 雄三	井上 将希
井原 博	今井 四郎	今井 晋	今井 文人	入澤 秀次	植松 宏	梅村 涉	梅本 由佳
蝦名 雅章	縁記 和也	猿渡 晴久	遠藤 公憲	遠藤 陽三	遠藤和可奈	大石 博昭	大久保 剛
大沢 一反	太田 永恵	大谷 昌宏	大藤 泰雄	大西 信樹	大橋 晃	大原 正範	大森 健充
岡坂 直寛	岡崎 駿志	岡田 英子	沖崎 遼	奥野 和弘	小熊 英敏	小田 庸男	小田切和博
小田原一史	小野 高秀	小原 大和	小原由美代	貝野 洋	梶原 鉄平	勝山 真吉	加藤 政俊
加藤 康夫	角谷 英則	金川 聖也	金川 眞行	金子 佳代	金子豊三郎	川村 明伸	川村多香子
河本 充司	菅野 正義	菊池 俊彦	衣川 暢子	木村 彰人	木村 幸文	久々湊 聖	楠目精之郎
工藤 正身	倉岡真希子	倉田 博司	栗原 誠治	桑原 一郎	桑原 拓也	小泉 武彦	上月 浩
後藤 航史	後藤 泰	小丹枝利昭	小林 賢人	小林 伸吉	近藤 浩正	齊藤 晋	齊藤 誠一
齋藤 久	斎藤瑠衣子	佐伯 昇	坂井 潔	坂下 憲治	坂本 大介	坂本 哲哉	崎元 大志
作田 善輝	櫻庭 都	佐々木三公子	佐藤貴美子	佐藤壮一郎	佐藤 久聡	佐藤 優子	澤田 武蔵
三升畑元基	塩川 典正	塩満 正哉	志済 聡子	志田 佳郎	柴田 恵子	芝田 行徳	渋谷真希子
嶋田 誠	菅埜 誠	菅原 新也	杉江 和男	鈴木 貴之	鈴木 弘	寸田 祐嗣	瀬戸 務

瀬名波栄潤	千徳 英雄	曾村 尚明	高瀬登志彦	高田 礼人	高野由美子	滝沢 繁	田栗 和奈
武井 徹	竹内 信彦	武越 靖郎	竹田洋一郎	田島 友子	立石 和子	立野 正敏	田中 博子
谷口 哲司	田村 友和	千川 浩治	塚原 和俊	辻井 友	對馬 新	津田 栄継	土屋 俊亮
土家 琢磨	津村 裕英	露木 茂	出口 廣志	出口 雅文	戸田 靖久	戸松 幹晴	豊田 威信
樋本 毅	仲尾 正司	長尾 輝彦	長岡 孝之	中西 年治	永埜 宗孝	中林 條	中村 雅夫
西田 和代	西田 雄二	新田 秀彦	根本 叔治	野口 豪	野坂 隆幸	野村 俊文	野本 健
花田 秀一	花村久美子	濱木 道大	林 里子	原 啓介	原 道子	原田 祐司	原湖 祐
半崎 貴敏	平岩 紀子	廣重 勝彦	福田 信也	福永 悟郎	藤井 聡	藤井 徳幸	藤井 治也
藤澤 裕子	藤澤 廣之	藤田 正隆	藤田 芳康	藤本 望	藤原 修司	舟津 渉	古川 哲
星 光流	本田 正人	本間 修	本間 博	前田 博	前羽 智美	松井 耕二	松澤 重治
松原 謙一	松村 雄	松元 和幸	松本 範雄	三浦 譲司	三木 證永	三田部 充	三原 達美
宮田 知己	宮田 信幸	宮本 伸之	村井 英樹	村上 広輝	村島 生祐	村瀬徳啓充	森 景子
森脇 育子	八重樫幸一	八重樫 稔	八木田道敏	柳井 清治	柳垣 繁	山口 利昭	山口 文晃
山崎 萌子	山田 哲	山田 和奈	山田 隆良	山本 知史	勇田 敏夫	幸 大地	余湖 兼右
横山 考	横山 卓弘	吉川 圭一	吉田 香織	吉田 俊宏	吉田 広志	葎本 倫大	渡辺 和哉

### <寄附者への特典>

#### 創基150周年を記念した銘板

創基150周年を記念した銘板をご用意しました。銘板は、これまでのご寄附累計金額をもとに、本学総合博物館に掲出させていただきます。個人・法人共に、ご寄附の累計が1億円以上でプレミアムゴールド、1千万円以上でゴールド、500万円以上でシルバー、100万円以上でブロンズとなります。

既存のホワイト銘板は累計20万円以上が対象です（令和2年度以前は総合博物館、令和3年度以降は百年記念会館に掲出）。なお、銘板については、年度内に賜ったご寄附の累計を取りまとめ後、翌年度9月頃を目途に掲出いたします。

※このほか、ご寄附の金額に応じ、オリジナルグッズや感謝状の贈呈、御礼の場など様々な特典をご用意させていただきます（詳細はこちらでご確認ください <https://www.hokudai.ac.jp/fund/gratitude/>）。

### <感謝状の贈呈>



株式会社三井住友フィナンシャルグループ様  
(令和8年3月6日)



齊藤誠一様 (令和8年3月26日)

## <紺綬褒章の伝達>



齋藤和雄様（令和8年3月13日）



寺崎善次郎様（令和8年3月13日）

## ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員からの寄附」にアクセスしてください。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff/>

### ①給与口座からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（給与口座からの引落）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室 基金事務担当に提出してください。

### ②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室 基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

### ③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室 基金事務担当までご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室 基金事務担当にもご用意していますので、お越しただいてからご記入いただくことも可能です。

### ④クレジットカード決済・コンビニ決済・PayPayでのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 卒業生・基金室 基金事務担当（事務局・学内電話 2017）

## 技術連携統括本部主催第2回ITeCHシンポジウムを開催

3月19日（木）に、学术交流会館小講堂で技術連携統括本部（ITeCH）主催第2回ITeCHシンポジウムを開催しました。現地参加とオンライン配信によるハイブリッド開催で、参加者数は現地76名、オンライン参加約100名でした。

行松泰弘理事による開催挨拶の後、「技術職員の人事制度等に関するガイドラインについて」と題して、文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課人材政策推進室の中村徹平室長による基調講演が行われました。

その後、「旭川高専における技術職員の活動とその意義－教育・研究・地域連携を支える専門職－」と題して、旭川工業高等専門学校長の矢久保考介校長による招待講演が行われました。

続いて、「ITeCH始動の現状」と題して、ITeCHの佐崎 元副本部長より

ITeCHの活動報告、「ITeCH専門部会報告」と題して、技術連携広報専門部会の佐藤健二部会長、研修実施専門部会の佐藤陽亮部会長、将来構想検討専門部会の木村 悟部会長より各専門部会の活動報告がありました。

その後、「R&Tコラボハイライト Researcher & Technicianの協働による新技術開発（自動巡回型RI汚染探査ロボットによる放射線施設のRI汚染検知システムの開発）」と題して、保健科学研究院の石川正純教授より、「R&Tコラボハイライト 遠隔リアルタイム農場実習プログラムの開発（R4年度）」と題して、北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場の星野洋一郎教授より講演が行われました。

コーヒーブレイク・ポスターセッション後に行われたパネルディスカッションでは、網塚 浩ITeCH本部長による

進行のもと、3月1日付で技術職員から特定上席専門職テクニカルサイエンティスト（TS）に配置換えになったITeCH／総合研究基盤連携センターの岡 征子TSとITeCH／アイソトープ総合センターの阿保憲史TSを新たに迎え、「『技術職員の人事制度等に関するガイドライン』を基に明日から何を変わっていくべきかを考える」というテーマで、技術職員の組織・人事・人材育成・財源の一体的な改革や、高等専門学校との技術職員との人事交流、技術連携などについて活発な討論が行われました。

最後に、網塚本部長による閉会の辞をもって盛況のうちに閉会となりました。

（技術連携統括本部）



行松理事による開会の挨拶



講演の様子



パネルディスカッション

# 産学・地域協働推進機構が台湾・国立陽明交通大学とMOUを締結 —アントレプレナーシップ教育とスタートアップ推進の国際連携へ—

産学・地域協働推進機構は、3月9日（月）、台湾の国立陽明交通大学（National Yang Ming Chiao Tung University：NYCU）産学共創オフィスと、アントレプレナーシップ教育及びスタートアップ推進に関する連携協定（MOU）を締結し、同日に調印式を実施しました。本協定は、日台をつなぐ産学共創・起業支援の新たな枠組みを構築するものです。

国立陽明交通大学は、台湾を代表する研究大学の一つであり、産学連携やイノベーション創出にも強みを有して

います。本協定には、日台双方のスタートアップチームと地域産業パートナーとのマッチングによる共創プロジェクトの推進、スタートアップ・エコシステムへの理解を深める短期集中型のアントレプレナーシップ教育プログラムの実施、さらに国境を越えた大学発スタートアップや共同事業体の可能性の検討などが盛り込まれています。

産学・地域協働推進機構では、挑戦する人材の育成と研究成果の社会実装を進めています。本協定は、教育とスタートアップ創出を両輪とした実践

的な国際連携であり、学生・教職員が海外の先進的な起業環境に触れながら学ぶ機会の拡大に加え、北海道と台湾を結ぶ新たな共創の展開が期待されます。

産学・地域協働推進機構は今後も、海外大学との連携を通じて、地域から世界へとつながる新たな学びと挑戦の場づくりを進めてまいります。

（産学・地域協働推進機構）

## 実施内容

日 程：令和8年3月9日（月）

場 所：フード&メディカルイノベーション国際拠点（FMI）



（左から）土屋 努副理事、瀬戸口剛理事・副学長、  
国立陽明交通大学の黄 經堯産創長、王 徳仁氏



調印式後の記念撮影

# 北海道大学が「知財功労賞 経済産業大臣表彰」を受賞

日本の知的財産権制度を積極的に活用した企業等を表彰する「知財功労賞」の令和8年度経済産業大臣表彰に北海道大学が選ばれました。

経済産業省特許庁は、日本の知的財産権制度を有効に活用しその発展に寄与した企業等に対して経済産業大臣表彰及び特許庁長官表彰を行っています。本学は経済産業大臣表彰の知的財産権制度活用優良企業等表彰（知財活用企業（特許））として、株式会社竹中工務店及び東レ株式会社と共に受賞しました。

4月17日（金）に東京で行われた表彰式には、寶金清博総長が出席しました。

寶金総長の強力なリーダーシップの下、産学連携組織のプロフィットセンター化と社会実装の推進に取り組み、以下の施策を通じて極めて高い実績を

挙げたことが評価されました。

## 1. 明確な目標設定と体制構築

教育・研究と社会展開が相互に成長するエコシステムを目指し、「共同研究拡大」と「知財収入増加」をKPIとする専門性の高い産学連携体制を構築。

## 2. 「みつける・みがく・うる」の実践

企業ニーズや求める技術成熟度（TRL）に合わせた学内シーズの価値向上（バリューアップ）と、国内外への積極的なマーケティング提案を粘り強く実行。

## 3. 戦略的なパイプライン確立

企業の事業計画に合わせた個別提案や海外展示会への出展、ライセンスモデルの再構築などを通じ、社会実装を牽引する特許ライセンス案件の道筋を確立。

これらの取り組みの結果、令和6年度の国内大学において「特許ライセンス収入 第4位（平成27年比17倍）」、「商標ライセンス収入 5年連続第1位」という優れた実績を達成しました。

当機構は、国内トップレベルの知財収入実績を基盤に、今後も「みつける・みがく・うる」の実践を深め、教育・研究の卓越性と社会展開力が相互成長するエコシステムを発展させてまいります。また、本学の優れた「知」を社会のニーズに合わせてバリューアップし、グローバルな社会実装を力強く牽引していくことで、本学と社会を繋ぐ架け橋として、次世代のイノベーション創出と持続可能な社会の発展に貢献してまいります。

（産学・地域協働推進機構）



令和8年度知財功労賞表彰式



知財功労賞経済産業大臣表彰受賞者記念撮影



### 令和8年度 知的財産権制度活用優良企業等表彰

## 知財功労賞 経済産業大臣表彰

---

知財活用企業（特許）

### 国立大学法人北海道大学

総長 寶金 清博

<https://www.hokudai.ac.jp/>

**企業概要**

所在地：北海道札幌市北区北8条西5丁目

創 基：150年

資 本 金：—

従 業 員：3,946人

事業概要：1876年創設の札幌農学校を前身とし今年創基150周年を迎える国立大学法人であり、教育・研究・社会貢献を柱とする総合大学



**受賞のポイント**

- ①教育・研究の卓越性（Excellence）と社会展開力（Extension）が相互成長する独自エコシステム構築を目指し、産学連携組織のプロフィットセンター化を目標に「共同研究拡大」と「知財収入増加」をKPIに設定。総長の強いリーダーシップのもと目標実現のための経験豊富な専門家の採用など新しい産学連携体制作りを積極的に推進。
- ②高い目標の達成にむけ、「みつける」「みがく」「うる」の具体的な行動指針を内部共有。メンバーの交渉スキル向上や成果達成度の高くなるなどの仕組み構築と同時に、「企業ニーズ視点の学内シーズ洗出し」「企業が求める技術成熟度レベル（TRL）に研究内容をバリューアップ」「国内外企業へのグローバルマーケティング提案強化」を粘り強く実践。
- ③着実なKPI達成の道筋作りとして、企業の事業計画を見据えた個別提案、海外展示会への積極的な出展、ライセンスモデル再構築など様々な取り組みを通じ、社会実装を牽引する幾つもの特許ライセンス案件のパイプラインを確立。  
2019年度には特許ライセンス収入が権利化維持費用を上回り黒字化、さらに2024年には国内大学4位を達成。商標ライセンス収入も5年連続国内トップを継続。



コストセンターからプロフィットセンターへの組織改革



特許権実施等収入（特許ライセンス収入）の推移



組織行動を促すDNA



幅広い研究分野での特許ライセンス実績  
(2024年度 3.4 億円の内訳)

表彰式で展示されたパネル

## 北海道大学 純米吟醸「北の閃き」の販売を開始

4月14日（火）より、北海道大学と日本清酒株式会社が共同開発した日本酒「北海道大学 純米吟醸 北の閃き（きたのひらめき）」の販売を開始しました。本商品は札幌キャンパス内の圃場で収穫された酒造好適米「きたしずく」を100%使用し、札幌市内で唯一の酒蔵である日本清酒株式会社にて醸造されたものです。

この日本酒造りは創基150周年記念事業の一環として実施された「日本酒造りプロジェクト」によるもので、学部や学年を超えた20名の学生が米作りから醸造作業まで携わりました。参加した学生にとっては、普段の授業や実習とは異なる新たな学びを得るとともに、創基150周年の節目に向けて自身

深める機会となりました。

なお、本商品は令和7年に試験的に醸造した純米酒「奥智（おくち）」に続く取り組みです。今回は、本学における酒米栽培及び日本清酒における北大産米での醸造が初の試みであったことから、教職員を中心に試験醸造を実施しました。

「北の閃き」は、精米歩合55%の純米吟醸で、やさしく華やかな香りと軽やかな飲み口が特徴です。販売本数は2,800本の数量限定として、インフォメーションセンター「エルムの森」内オリジナルショップや北海道大学生協同組合、道内量販店等で販売されています。

また、商品の販売に先立ち、4月3日（金）には報道関係者向けの説明会を

開催しました。当日は横田 篤副学長、北方生物圏フィールド科学センター長の星野洋一郎教授のほか、日本清酒株式会社の佐藤友治代表取締役社長、「北の閃き」のネーミング及びラベル考案者である学生の野村郁子氏など関係者が登壇し、開発の背景や特徴について説明が行われました。試飲も実施され、本商品の魅力を発信する機会となりました。

今回の商品開発で得られた経験は、新たな北大ブランド展開のモデルケースとなりました。産学・地域協働推進機構はこの経験を活かし、引き続き北大ブランド認定商品の認知拡大及び多角的な展開を目指してまいります。

（産学・地域協働推進機構）



北海道大学 純米吟醸「北の閃き」



日本酒造りプロジェクトの活動の様子



関係者による報道説明会の様子

## きたキッチンで「北海道大学フェア」を開催

4月8日（水）～4月14日（火）に、道産食品セレクトショップ「きたキッチン」オーロラタウン店で、北大ブランド認定商品の販売を行う「北海道大学フェア」を開催しました。令和4年から始まり、今回で5回目の開催になります。

本フェアでは大学が開発に関わった食品等を販売すると同時に、商品開発に至るストーリーや商品に活用されている研究成果を一緒に伝えることにより、商品のPRと大学の研究成果の社

会還元を目指しています。

今年の北海道大学フェアでは、数ある北大ブランド認定商品の中から約60アイテムを出品しました。

今回は北海道大学創基150周年記念事業として、教職員・学生が一丸となって米作りから醸造まで行った北海道大学純米吟醸「北の閃き」をはじめ、北の閃きの「酒粕」、遺伝子病制御研究所の宮崎忠明特任教授が分析したクラーク乳酸菌を配合した「北大クラーク大福」が初登場しました。

北大クラーク大福と北方生物圏ワールド科学センターで品種改良された北大ラズベリー®を使用した「米粉のまどれーぬ ラズベリー」は、大学構内での取り扱いがないため、来店者が興味深く手に取る姿も見られました。今後も、産学・地域協働推進機構では北大ブランド認定商品を通じたブランド力の向上と情報発信により、地域との連携と社会貢献に努めてまいります。

（産学・地域協働推進機構）



店頭の様子



説明を興味深く聞く来店者

# 帯広を舞台とした企業の課題解決型ワークショップ 「私がつくるまちの未来 Obihiro Next」を開催

産学・地域協働推進機構スタートアップ創出本部は、SCSK北海道株式会社及び帯広市との共催で2月21日（土）に、とかちのやりたい実現カフェ「LAND」にて、「私がつくるまちの未来Obihiro Next」を開催しました。本プログラムは、帯広の高校生・大学生が、本学の留学生らとの交流を通じ、地元やその企業の魅力を再発見するとともに、地元企業が抱える課題の解決に向けたアイデア創出に取り組むもので、異文化理解を深めるとともに創造性や行動力といったアントレプレナーシップを育むことを目的としています。

当日は、高校生13名・大学生1名が参加し、本学の留学生がグループワー

クのサポート役を務めました。参加者はグループに分かれて、十勝地域の企業から提供された商材を体験しながら議論を重ね、提示された課題の原因を深掘りしました。そして、多様な文化的背景をもつ留学生や世代の異なる学生、それぞれの視点を取り入れながら、課題解決に向けた具体的なアイデアの創出に取り組みました。最後にはグループごとにアイデアを発表し、SNSを活用した商品PRの方法や新たな商品開発のアイデアなど、企業の強みや商品の魅力、地域資源を生かした提案が行われました。

参加者からは「企業から提示された課題に対する解決アイデアに実現可能性を感じ、やりがいを得ることができ

た」「アイデア創出にとどまらず、実社会とのつながりを実感できた点があった」などの感想が寄せられました。地域資源の価値や新たな活用の可能性について多角的に考えるとともに、具体的な商品開発案やプロモーションアイデアを検討する体験を通じて、ビジネスと地域の魅力を結びつける貴重な経験を得るイベントとなりました。

産学・地域協働推進機構は、今後もアントレプレナーシップ教育を通じて、これからの北海道を牽引する人材の育成に貢献してまいります。

（産学・地域協働推進機構）

## 実施内容

日 程：令和8年2月21日（土）

場 所：とかちのやりたい実現カフェ「LAND」

対 象：高校生・大学生14名

主 催：産学・地域協働推進機構、SCSK北海道株式会社、帯広市

協 賛：株式会社十勝スロウフード、十勝冷凍食品株式会社、株式会社柳月

後 援：HSFC（北海道未来創造スタートアップ育成相互支援ネットワーク）

運 営：Beeber Global



アイスブレイクの様子



グループワークの様子



発表の様子



集合写真

# 「NINEJP Cross-Border Session～未来を切り拓く、アグリバイオの挑戦～」を開催

2月25日（水）、北海道庁旧本庁舎赤れんが庁舎において、「NINEJP Cross-Border Session～未来を切り拓く、アグリバイオの挑戦～」を開催しました。本セッションは、中国・四国エリアのPSI、東海エリアのTongali、北海道エリアのHSFCの3つの大学発スタートアップ支援プラットフォームが主催し、NINEJP\*が後援する地域横断型の特別イベントであり、北海道最大級のグローバルスタートアップカンファレンス「SHAKE H」のプログラムの一環として実施したものです。

本イベントは、パネルディスカッションとピッチセッションの2部構成で実施しました。

第1部では、NINEJP座長の渡部俊也氏（東京科学大学研究・イノベーション本部副学長（スタートアップ担当））、

滝上菊規氏（広島大学スタートアップ推進部門長）、小田一郎氏（名古屋大学学術研究・産学官連携推進本部主任URA）、小野裕之産学・地域協働推進機構スタートアップ創出本部長をパネリストに迎え、滝田陽介同スタートアップ支援部門長がモデレーターを務め、各プラットフォームの特徴的な取組や連携の可能性について発表を行いました。

第2部では、アグリバイオ分野をテーマに、ピッチセッションを実施しました。各プラットフォームから選抜された研究者6名が登壇し、最先端の研究成果と社会実装に向けた今後の展開について発表を行いました。本学からは農学研究院の貴島祐治教授が、「避暑型水稻を3年で創るプラットフォーム」をテーマに登壇し、最先端かつグロー

バル市場において期待される研究成果を発表しました。あわせて実施したポスターセッションでは、研究者とイベント参加者が直接対話する機会が設けられ、事業連携や新たなビジネス創出の可能性を探りました。

本イベントを通じ、地域や組織の枠を越えた知の交流が生まれ、アグリバイオ分野における新たな連携と発展の可能性を見出す機会となりました。本イベントを契機とし、今後も研究成果を軸とした、国内外の価値の創造につながる活動に取り組んでまいります。

\* NINEJP：全国9拠点の大学発スタートアップ支援プラットフォームが連携するイノベーションエコシステム。国内160以上の大学・研究機関等が参画。

（産学・地域協働推進機構）



講演する貴島教授

# アントレプレナーシップ教育プログラム成果報告会 「Hokkaido Innovation Hunter」を開催

産学・地域協働推進機構スタートアップ創出本部は、3月7日（土）にサッポロファクトリーホールにおいて、北海道内のアントレプレナーシップ教育プログラムの成果報告会「Hokkaido Innovation Hunter」を開催しました。本報告会は、本学が主幹機関を務めるHSFC（北海道未来創造スタートアップ育成相互支援ネットワーク）が実施した各教育プログラムの集大成として、小中高生から大学院生までの参加者が、それぞれの活動成果を報告し、相互の交流を深めることを目的に実施

したものです。

当日は、全道各地から集まった小中高生15チーム、大学生9チームに加え、5社の学生スタートアップが登壇し、自らの挑戦やそこから得られた学びについて熱意のこもった報告を行いました。また、トークセッションでは、グローバルアントレプレナーを目指す高校生・大学生や、地域創生に挑む学生らによるパネルディスカッションが実施され、次世代を担う若者たちの視点から活発な意見交換が行われました。その後のネットワーキングにおいて

は、登壇した学生らに加え、学校教員や起業家、アントレプレナーシップ教育に関わる企業関係者など、200名を超える参加者が年齢や立場といった枠を越えて、本報告会での学びを共有するなど、貴重な交流の場となりました。

産学・地域協働推進機構は、今後もこうした多様なセクターとの連携を通じて、アントレプレナーシップ教育を推進し、北海道の未来を担うイノベーション創出に貢献してまいります。

（産学・地域協働推進機構）

## 実施内容

日 程：令和8年3月7日（土）

場 所：サッポロファクトリーホール

参加者：202名（小中高生、大学生、大学院生、学校教員、起業家、一般企業関係者）

共 催：HSFC、STARTUP HOKKAIDO実行委員会、小樽商科大学

後 援：公立はこだて未来大学、北海道教育大学岩見沢校、北海道情報大学、北海道教育庁学校教育局高校教育課



報告を行う高校生



報告を行う工学研究院の牧 駿氏



参加者同士の交流



参加者の集合写真

## 研究シーズの事業化支援プログラム「北海道BRAVE2025」成果報告会を開催

3月27日（金）、日本橋ライフサイエンスビルディングにて、研究シーズの事業化支援プログラム「北海道BRAVE2025」成果報告会を開催しました。

本プログラムは、大学等で培われた研究成果を事業化につなげるための支援プログラムであり、本学が主幹機関を務める北海道未来創造スタートアップ育成相互支援ネットワーク（HSFC）、札幌市及びSTARTUP HOKKAIDO実行委員会が主催し、ディープレック・ベンチャーキャピタル Beyond Next Ventures株式会社が運営に協力しています。

今回の成果報告会では、本プログラムを通じて結成された、創業・事業化を目指す8チーム（研究者8名、経営者

候補21名）が、約4か月間にわたり取り組んできたビジネス仮説の検証や事業計画の策定の成果を、ピッチ形式で発表しました。本報告会は、今後、スタートアップとして事業会社や投資家に対して事業の魅力を分かりやすく伝える実践の機会であるとともに、外部からのフィードバックを得る場でもあり、創業に向けた大きなステップアップの機会となりました。

最優秀賞には、スタートアップとして最も大きな成長が期待されるチームとして、公立はこだて未来大学システム情報科学部の櫻沢 繁教授による「レザバーコンピューティングを用いた指角度・指関節トルクを推定可能な筋電義手制御システムの開発」に取り組む「ASHURA Nexus」チームが選ば

れました。また、プロジェクトの進展に特に貢献した経営者候補人材に贈られるILP賞には、本学工学研究院の原田周作准教授のチーム「チームS&P」に参画した経営者候補人材が選ばれ、それぞれ受賞しました。

参加した研究者からは、「開発の視点で必要な論点が整理され、今後の研究・事業化に直結する方向性が明確化した」「初期的な顧客ターゲットが定まり、具体的な連携に進展した」といった声が寄せられ、本プログラムが事業化推進において非常に有意義な機会であったことがうかがえました。

（産学・地域協働推進機構）



最優秀賞を受賞した櫻沢教授チーム

# 北海道大学Climate Action Planを策定

本学は、2050年に向けた温室効果ガス（GHG）削減目標の達成を目指す行動計画として「北海道大学 Climate Action Plan」を策定し、本年3月にサステナビリティ推進機構のウェブサイトで公表しました。本計画は、北海道大学GHGインベントリ2022で把握した排出実態を踏まえ、具体的な目標と取組を示すものです。

本学は、HU VISION 2030において「持続可能性の追求」を掲げるとともに北海道大学サステナビリティ宣言においても、気候変動対策を重要課題の一つとして位置づけています。また、国の「地球温暖化対策計画」では、国立大学法人等が含まれる「業務その他部門」に対し、2030年度までに2013年度比でGHGを51%削減することが求められています。こうした背景を踏まえ、本学として2030年度及び2050年度の目標達成に向けた実行計画を体系的に示す必要があることから、「北海道大学 Climate Action Plan」を策

定しました。なお、本計画では、2030年度までにScope1\*1・2\*2のGHG排出量を2013年度比で51%削減し、2050年にはScope1・2・3\*3を対象としたカーボンニュートラルの実現を目指すこととしています。

本計画では、カーボンニュートラルの実現のため、行動変容による省エネルギー対策と再生可能エネルギーの積極的な導入を基本方針とし対策を推進します。また、環境価値の活用や、本学が所有する森林吸収等によるオフセットで補完することを検討します。あわせて、再生可能エネルギーの導入・調達にあたっては、生物多様性や景観・眩光・災害時の安全等に十分配慮し、地域と共生できる健全なエネルギーを選択することを原則としています。

さらに、本計画の推進にあたっては大学組織が実践に取り組みやすい環境づくりを整えるとともに、学内関係者の一体感を醸成し、学生・教職員が世代や立場を超えて連携できる基盤づく

りを進めます。脱炭素を起点として様々な課題解決に取り組むことにより、教育・研究の新たな機会を創出するとともに、学内外での研究成果の社会実装を推進していきます。

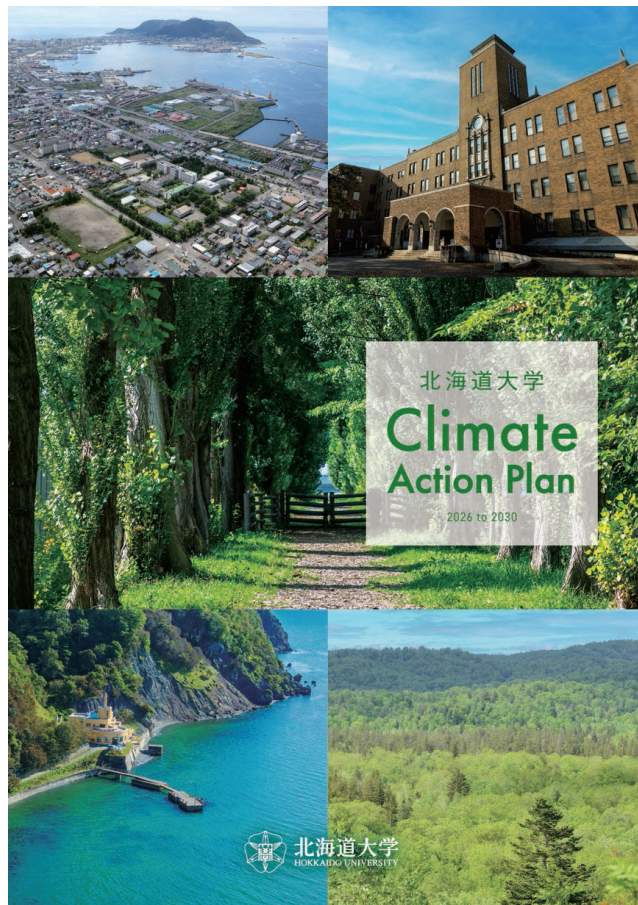
本学は、教育・研究機関としての強みを活かし、カーボンニュートラルの実現に向けた研究開発や人材育成を通じて、地域社会や産業界との共創を進め、社会的責任を果たしてまいります。

## ■北海道大学 Climate Action Plan

[https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/plan/climate\\_action\\_plan/](https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/plan/climate_action_plan/)

- \*1 Scope1：事業者自らの直接排出  
(例：燃料の燃焼、農業、畜産)
- \*2 Scope2：電気等の使用に伴う間接排出  
(例：電気・熱の使用)
- \*3 Scope3：Scope1・2以外の間接排出  
(例：出張、通勤、廃棄物)

(サステナビリティ推進機構)



北海道大学Climate Action Plan

# インターンシップ&就職活動スタートアップガイダンスを開催 ～令和8年度キャリアデザインセンター就職ガイダンスがスタート～

4月17日（金）、キャリアデザインセンター主催「インターンシップ&就職活動スタートアップガイダンス」を開催しました。

キャリアデザインセンターでは、年間を通じてインターンシップや就職活動に関するガイダンス、講座、セミナー等を実施しており、多くの学生が参加しています。本ガイダンスは、年度初回のスタートアップ企画として、就職活動及びインターンシップの全体像や最新動向を伝えることを目的に開催し、当日はオンライン（Zoom）にて約310名の学生が参加しました。

ガイダンスの冒頭では、まず亀野淳キャリアデザインセンター副センター長が挨拶し、その後、吉田梨恵インターンシップマネージャーから、就職活動の全体的な流れやスケジュール、インターンシップの位置づけ、本学における各種支援制度について説明を行

いました。

続いて、実際の就職活動の現場で様々な企業・団体の採用に関わる採用コンサルタントを務める、2名の就職情報会社の方にご登壇いただき、パネルディスカッション方式で現在の就職活動や企業側の採用活動について講演を行いました。登壇者からは、数字やデータを用いながら文理別の状況などを分析した解説や、様々な業界の採用活動の実情や裏側についての話がありました。

その後、40分以上にわたって質疑応答を行い、学生の不安や疑問を解消する場となりました。参加した学生からは、「就活に対する漠然とした不安が解消された」「企業側の目線を直接聞くことができ、今後の行動の指針が明確になった」などの意見があり、勉強や研究活動と両立しながらの就職活動に対する不安を解消するアドバイスな

ど、本学の事情に沿った内容に満足の声がありました。

キャリアデザインセンターでは、インターンシップの支援や学部1年生から活用できるキャリアガイダンスや就職活動に関するガイダンスなど、年間を通じて様々なセミナーを行っています。講演はオンデマンドなどで柔軟に参加できるようにし、対面での交流機会やワークショップなど、多様なスタイルで学生にあわせた支援を増やしていく予定です。また、就職活動について、学生への個別キャリア相談も実施しています。

詳細はキャリアデザインセンターのウェブサイトです。随時公開していますので、ぜひ学生の方へご案内ください。  
<https://cc.academic.hokudai.ac.jp/>

（教育イノベーション機構）

日時：令和8年4月17日（金）18:30～20:30

会場：オンライン配信及びオンデマンド配信

※オンデマンド配信について学生はキャリアデザインシステムで視聴可能

パネリスト：株式会社マイナビ キャリアデザイン事業本部大学・社会連携推進準備室 久保潤一郎氏

Indeed Japan株式会社 Senior Director 村瀬正憲氏

主催・企画・当日進行：教育イノベーション機構キャリアデザインセンター



就職活動やキャリアデザインセンターについて講演の様子



パネルディスカッションでの意見交換



配信会場

# インターンシップ&就職活動スタートアップガイダンスを 函館キャンパスにて開催

4月24日（金）、キャリアデザインセンターと水産学部・水産科学院の共催で「インターンシップ&就職活動スタートアップガイダンス@函館キャンパス」を開催しました。

函館キャンパスでは水産学部・水産科学院の学生に向けて年間を通じて就職ガイダンスを実施しています。キャリアデザインセンターが初回のガイダンスを担当しており、当日は48名の学生が参加しました。

ガイダンスの冒頭では、まず川上あきキャリアデザインセンター学部・修士就職支援ユニット長が挨拶し、その後、吉田梨恵インターンシップマネージャーから就職活動の現状や本学のインターンシップや就職支援についての

説明を行いました。続いて、本学卒業生で国立研究開発法人水産研究・教育機構の人事担当者である福田紗和氏とホクレン農業協同組合連合会の里城緑氏に登壇いただき、採用スケジュールや企業・組織が学生を見る際の視点、水産学部・水産科学院出身者への期待などについて、具体的な事例を交えながらお話しいただきました。

参加した学生からは、就職活動に対する不安が解消されたことや、研究と両立した就職活動について計画を立てるイメージが持てたなどの満足の声がありました。

また、札幌からキャンパスが離れている函館キャンパスでの就職活動について不安を感じている学生からは、

「対面で企業人事担当の話を聞く機会がもっと欲しい」「函館でも企業やキャリアデザインセンターと対面やオンラインで支援が受けられることがわかった」などの声もありました。

キャリアデザインセンターでは、今後も函館キャンパスにて相談員との対面キャリア相談を実施するなど、普段キャリアデザインセンターに来ることが難しい函館キャンパスに通う学生の支援を行ってまいります。

<https://cc.academic.hokudai.ac.jp/>

（教育イノベーション機構、水産科学院・水産科学研究所・水産学部）

日 時：令和8年4月24日（金）18:30～20:00

会 場：函館キャンパス 大講義室

パネリスト：国立研究開発法人水産研究・教育機構 総務部人事課採用担当 福田紗和氏

ホクレン農業協同組合連合会 管理本部人事部人材開発課 主幹 里城 緑氏

主催・企画・当日進行：教育イノベーション機構キャリアデザインセンター



会場の様子



（右から）ホクレン農業協同組合連合会 里城氏、水産研究・教育機構 福田氏

# 「春の園遊会」に長谷山美紀教授が出席

4月17日（金）、情報科学研究院メディアネットワーク部門の長谷山美紀教授が赤坂御苑（東京都港区）で開催された春の園遊会に招かれ出席しました。

園遊会は天皇皇后両陛下が主催され、毎年、春と秋の2回、赤坂御苑で開催されています。

今回の園遊会には、立法・行政・司

法各機関の要人、都道府県の知事・議会議長、市町村の長・議会議長、各界功績者など、約1,750人が招待されました。

長谷山教授のコメント

天候にも恵まれ、両陛下をお迎えするまでの間、参列の皆様との交流や御苑の豊かな自然に触れる貴重な時間を

過ごしました。池に映える満開の藤は格別で、学究の日々を離れ伝統的な庭園美を楽しむ機会となりました。両陛下や皇族方の温かなおもてなしを間近に拝見し、誠に感銘深い経験となりました。

（情報科学研究院）



赤坂御苑菖蒲池前にて



満開の藤棚を背に、渡海紀三朗衆議院議員（元文部科学大臣）とともに



開宴を待つひととき、小林茂樹衆議院議員（文部科学副大臣）とともに



赤坂御苑の風景

## 国際広報メディア・観光学院が台湾にて留学生向け説明会を実施

国際広報メディア・観光学院は、3月29日（日）、台北市内コンベンションホールにて留学生向け説明会を開催しました。今回は対面とオンラインのハイブリッドで開催し、対面10名、オンライン約13名の参加がありました。加えて、在學生もオンラインで1名参加しました。

奥 聡学院長の挨拶に続き、例年通り、学院の紹介と入学試験の概要、大学院生としての学修システム、研究生制度と書類審査応募の概要、研究生としての学習、研究計画書作成に際してのポイントなど、留学希望者にとって必要な情報が提供されました。全体説明後に設けられた質疑応答の時間では、修了後の主な進路や求められる語学力のレベル、研究生応募のために必要な準備、北大の学習環境などについ

て意見が交わされました。在學生からも、自らの体験をもとにきめ細やかな説明と助言がありました。対面の参加者からは、自らの問題関心と学院との整合性といった、留学を見据えた具体的な相談が多く寄せられました。

説明会後に実施した参加者アンケートでは、回答者全員が説明会を高く評価し、具体的には「現場に教員が来ており、個別に相談することができた」「多様な言語で質疑応答に対応していたことがよかった」「研究計画書作成の説明が実践的で有益であった」「提供される資料がわかりやすく充実していた」などの感想を得ました。

説明会を通じて、参加者の北大留学への熱意と関心の高さを強く感じました。とりわけ、3度目の現地開催となった台湾各地からの参加者は全体の8

割を超えており、電車で2時間半かけて参加してくれた学生や、以前実施した説明会で留学を志し、再び参加してくれた学生もおり、現地に赴いて説明会を開催することへの手応えを得ました。さらにアンケート回答者の半数以上が所属する大学からの情報を得て説明会への参加を決めていることから、台湾各地の名門国立・私立大学での認知度が向上していることがうかがえました。

今後も対面とオンラインのそれぞれの強みを生かしながら、様々な地域で開催を試みるとともに、現地開催ならではの出会いを大切に地域ごとの同窓会の組織化などについても前向きに検討したいと考えています。

（国際広報メディア・観光学院）



説明会の様子

## 脳科学研究教育センター脳科学専攻の開講式を挙行

脳科学研究教育センターでは、4月6日（月）に医学部において、今年度入学した履修学生の開講式を行いました。

はじめに、小川宏人脳科学研究教育センター長（理学研究院教授）から、祝辞とともに脳科学専攻の特色ある教育体制や研究指導内容について説明があり、「センターが主催するシンポジウムや合宿研修、修了発表会、指定セミナーなど様々なイベントを通じて、

所属部局や出身学部、研究対象、実験手法、職種、課程、学年などの垣根を越えた研究交流を図り、視野の広い専門家とされるよう頑張っていたきたい」との激励がありました。

引き続き、出席したセンター教員と履修学生の自己紹介の後、山崎美和子教務専門委員会委員長（医学研究院教授）から、修了要件についての説明と履修に関するガイダンスがありました。

開講式終了後には、同会場にて新入生歓迎交流会が行われ、参加者は所属部局の違いを越えて情報交換を楽しんでいました。

本専攻には、今年度7名の履修学生（修士課程4名、博士後期課程3名）が加わり、全体では25名の履修学生が在籍することになります。

（脳科学研究教育センター）



小川センター長より祝辞



新しく加わった履修学生とセンター教員

## 附属図書館北図書館2階アクティブラーニングフロアが「Suzuyo Mirai Square」に名称変更—鈴与株式会社とネーミングライツ契約を締結—

北海道大学は、鈴与株式会社（代表取締役社長 鈴木健一郎氏）と、附属図書館北図書館2階アクティブラーニングフロア（以下「本施設」という。）に関するネーミングライツ契約を締結し、4月1日（水）より名称が「Suzuyo Mirai Square」に変更されました。これに伴い、4月17日（金）、本施設にて記念式典を行いました。

記念式典には、鈴与株式会社から鈴木一寿常務取締役をはじめ同社の方々、本学から山本文彦附属図書館

長、佐藤美洋附属図書館北図書館長が出席しました。山本附属図書館長から「北図書館は全ての学部の学生が利用する図書館です。鈴与株式会社の支援に感謝するとともに、本施設が多くの学生に利用され、知の交流と創造の拠点としてますます発展していくことを期待しています」と挨拶がありました。引き続き、鈴木常務取締役から、「多くの人材を社会に送り出してきた北海道大学とこのようなご縁をいただいたことに深い意義を感じています。

今後も大学との連携を通じ、次世代人材の育成と地域社会の持続的な発展に貢献していきます」と挨拶がありました。

鈴与株式会社がスポンサーシップ契約を結んでいる本学体育会サッカー部員の出席もあり、盛況のうちに終了しました。

（附属図書館）



テープカット（左から山本館長、鈴木常務取締役、佐藤北図書館長）



本学体育会サッカー部員との記念撮影

## ■ 研修

### 令和8年度北海道地区国立大学法人等初任・新任職員研修

開催期間：令和8年4月8日（水）～10日（金）

開催場所：北海道大学学術交流会館第一会議室、第四会議室

研修目的：北海道地区国立大学法人等の職員としての求められる心構えを自覚するとともに、初任・新任職員として必要な知識を習得させ、あわせて組織の垣根を超えたネットワーク形成を図ることを目的とする。

主催部局：総務企画部人事課



訓示（實金清博総長）



特別講話（長谷川康弘副学長）



受講風景（株式会社フォーブレン）



受講風景（ワークショップ）

# ■人事

令和8年5月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【教授】 大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター教授	村 井 芳 夫	大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター准教授

## 新任教授紹介

令和8年5月1日付



理学研究院教授に

むらい よしお  
**村井 芳夫 氏**

附属地震火山研究観測センター

### 生年月日

昭和40年9月20日

### 最終学歴

東京大学大学院理学系研究科博士課程修了 (平成7年3月)  
博士 (理学) (東京大学)

### 専門分野

海底地震学

## 訃報

教授 澤村 正也 氏

(享年64歳)



教授 澤村正也先生が令和8年4月21日にご逝去されました。

澤村先生は昭和55年3月に私立土佐高等学校を卒業後、同59年3月に京都大学工学部合成化学科を卒業、平成元年3月に同大学院工学研究科博士課程を単位取得認定退学され、同年5月に同課程修了により京都大学工学博士の学位を取得されました。

平成元年4月に京都大学工学部合成化学科助手に採用され、同5年9月から同6年8月まで米国ハーバード大学化学

科研究員を務められました。その後、平成7年3月に東京工業大学理学部化学科助手、同年6月に東京大学大学院理学系研究科化学専攻助手に着任され、同8年2月に同講師、同9年8月に同助教授へ昇任されました。平成13年1月には北海道大学大学院理学研究科化学専攻教授に着任され、同18年の改組により理学研究院化学部門教授となりました。さらに平成28年4月から令和4年3月まで北海道大学ディスティングイッシュトプロフェッサーを務められ、平成30年10月から令和5年3月まで北海道大学創成研究機構化学反応創成研究拠点（WPI-ICReDD）主任研究者を兼任されました。

澤村先生は、有機合成化学、触媒化学、精密有機合成の分野において先駆的な研究を展開され、多くの優れた業績を挙げられました。特に、革新的な触媒設計に基づく触媒的不斉合成反応の開発及び高活性な固定化触媒の創製において顕著な成果を収められ、学術のみならず産業界の発展にも広く貢献

されました。その成果は国内外で高く評価され、平成24年に日本化学会学術賞、同27年に有機合成化学協会日産化学・有機合成新反応／手法賞、同29年に名古屋メダル（シルバーメダル）、同31年に有機合成化学協会賞、令和3年に文部科学大臣表彰科学技術賞研究部門を受賞されるなど、当該分野の発展に多大な貢献を果たされました。

また、平成17年から同23年まで環境保全センター長を兼任され、同23年からは安全衛生本部副本部長を兼任されるなど、北海道大学における安全衛生及び環境保全に関する運営にも尽力されました。これらの活動を通じて、全学の教育研究基盤を支える体制の整備・運営に大きく貢献されました。

澤村先生の長年にわたる教育研究及び大学運営へのご貢献に改めて深く感謝し、ここに謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(理学院・理学研究院・理学部)

## 編集メモ

---

- 初夏の訪れを感じる季節となりました。ライラックの花が見頃を迎え、キャンパス内では木々の緑もいっそう深まり、爽やかな景観が広がっています。
- 第68回北大祭が6月5日（金）～6月7日（日）に開催されます。今回のテーマは「星譜」です。ぜひお越しください。 <https://hokudaisai.com/>





## キャンパス懐古 14 エルムが緑葉を広げ始めるメインストリート南端(1964年5月)

1960年代のメインストリートは、車の往来も多くはなく、歩道も設置されていません。道路間近にエルムの大樹が立ち並び、道路を被うように枝を伸ばして葉を広げ、夏には緑のトンネルを形作りました。

当時のメインストリートの南の終点は中央講堂です(写真奥)。クラーク像近くの、現在ロータリーとなっているあたりを入口として建っていました。式典や、

講演会・演奏会・演劇などの会場となり、部・サークルの部屋としても使用され、学生にも馴染み深い建物でした。1964年秋に取り壊され、その役割は新築のクラーク会館や体育館に引き継がれます。

(大学文書館・北海道大学150年史編集室)

北大時報 ⑤ No.866 令和8年5月発行

北海道大学社会共創部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL : (011) 706-2610 / FAX : (011) 706-2092 / E-mail : kouhou@jimuhokudai.ac.jp

<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>